

# 李恢成文学の世界

渡 邊 澄 子 (大東文化大学名誉教授)

## Li kaisei's novels and his vision of the society

Sumiko WATANABE

李恢成は、金石範(『文芸年鑑』には1925・10・2)、『日本近代文学大事典』には8・15)の十歳年下(1935・2・26)と『文芸年鑑』に記載。『日本近代文学大事典』や1972年の刊の『新鋭作家叢書』『李恢成』末尾の「年譜」には1933・7・15とある)の後輩に当たる在日朝鮮人作家である。この二人は相前後して作家活動を開始している。金石範が二年ほど早いのが、衝撃的名作『鴉の死』(1937・9、新興書房)は、なぜか問題視されず、当時注目されていた小田実たちの『人間として』に掲載された「万徳幽霊奇譚」(1970・12・7・11、筑摩書房)が注目されて、そこで初めて『鴉の死』が蘇ったという経緯がある。「万徳幽霊奇譚」発表の前年作「またふたたびの道」が群像新人賞を受賞し、李恢成が一步先に文壇デビューを果たしている。「砧をうつ女」で七十二年に芥川賞を外国人として始めて受賞し、九四年に「百年の旅人たち」(上下)が野間文芸賞を受賞している。

そこで、優れた在日朝鮮人作家は他にも多くいるが、とりあえず、異論もあるだろうがこの二人を採りあげることにした。本稿では李恢成文学を本旨とするが、創作方法の対象的な二人について概略を述べることにする。金石範の『鴉の死』を読んだときの衝撃は今に至るも忘れられない。映画監督崔洋一が「20世紀の名著」欄(1999・3・14『東京新聞』)で、この作品を読んだとき「絶望と希望の壮大なカオスに僕は全身の血が逆流した」とのべているが、まさにその通りの作品である。だが、「年表の会」による『近代文学年表』には『鴉の死』は載っていない。『鴉の死』は、一九四八年に起きた濟州島四・三事件を素材とした作品である。金石範の両親の故郷が濟州島ということにもよるだろうが、個人的問題を離れて、金石範の作家的営為は『鴉の死』を原点として濟州島四・三事件の語り部といっても過言ではないほど表現し続けてきていて、その集大成といえる『火山島』全七巻(1983~97、『文藝春秋』)に結実している。

私事になるが、済州島には二度行っている。一度目は『鴉の死』の存在を知らず、まだ読んでいなかったはずいぶん以前のことだが韓国の大学に集中講義に招かれた時、韓国では新婚旅行のメッカだったこの島に誘われて行った観光旅行だった。二度目は『鴉の死』にショックを受け、「万徳幽霊奇譚」に感動した後だった。韓国日本文学会から講演を依頼され、講演後、複数の大学の教員たちから質問攻めにあい、四日間にわたって応じた後、学位論文の指導に当たった教え子達といっても、四十代後半の教授職にある人も交じる七、八人が済州島行きを企画してくれた。『鴉の死』へのショックが私の心に渦巻いていたので好意を受けることにしたが、観光ではなく、当時のことを知っている方にご案内いただいで、四・三事件跡を見て回れないだろうか頼んだ。彼らは四・三事件を知らなかった。韓国ではタブーとされていたのだ。驚いた私は簡単に説明して、自国の歴史を知らなければだめじゃないの、と言ったのだが、これは大恥だった。タクシーを使えば六時間で回れる小さな島を二泊三日かけて、当時を知る高齢の方のご案内で見て回った。至る所に遺された残虐の跡に私たちは息をのんだが、さらに、私を驚愕させ、身を縮めさせたのは、この島が日本軍の攻撃発進基地にされていたことだった。歴史への無知を詰った私こそ侵略者の国の一人として、知らねばならぬ事であり、知って懺悔すべき事だったのだ。飛行場跡は畑になっていたが格納庫や弾薬庫などは、雑草の茂るに任されていて、ここにも、ここにもと、数の多さに胸が締め付けられた。さらに、海岸には特攻隊の発進基地だったといわれる広い洞窟がいくつも見られた。強制的に島民に作らせたものという。植民地とされていた時代だった。戦後、謝罪や補償はしたのだろうか。私は深々と彼らに頭を下げ無知を詫言じた。

金石範にとって「戦後」とは「済州島」だったと言うが、戦中は日本軍の基地とされていて、済州島は他国によって犠牲とされ続けていたのだ。「済州島警察監房では『釈放!』と虐殺は同義語だった」と「看守朴書房」に書かれているが、日本の植民地統治（注1）からの「解放」が幻影であることを知って、新しい支配者アメリカと李承晩政権に対して蜂起事件が起きたが、その最大のものが金石範が執拗に追求している済州島の叛乱だった。一九四八年四月三日、済州島民は武装蜂起して、島の中央の漢羅山（ヘルサン）にたてこもった。アメリカの求めに応じた李承晩は全島民三〇万人に対して殺戮を行い、島民の半数近くが虐殺されたという済州島事件は金石範文学そのものである。金石範と李恢成の小説作法は対象的だ。金石範は私小説的な自己語りの方をとらず、四・三事件を芯にしているがフィクション構成されているのに対して、李恢成は私小説に矮小化させずにフィクションで幅を広げているが、政治問題にも踏み込みながら自己や家庭が素材の軸になっている。李恢成の両親の故郷が父は北、母は南ということも影響しているだろうが、「北であれ南であれわが祖国」の信念から南北統一の実現を片時も忘れない立場に立つのに対して、金石範は民族の統一が果たされた朝鮮こそがわが祖国という考えに立つ。作品の方法や生き方に違いがあっても在日二世のこの二人（に限らぬが、今はこの二人に絞ることにする）の文学が、日本の文壇にはこれまでなかった新しさとして日本文学受者たちは感受し、刺激を受けたのは確かといえるだろう。

李恢成文学の世界を語る上で欠かせないのは長編というより大河小説の部類に入る『見果てぬ夢』全十六卷（講談社「1971」）および『地上生活

者』分厚い全五巻(講談社 2000-2015)だが、『地上生活者』は、『またふたたびの道』(1969・6『群像』)「われら青春の途上にて」(69・8『群像』)「死者の遺したもの」(70・2『群像』)「証人のいない光景」(70・5『文学界』)「伽耶子のために」(70・8・9『新潮』)「武装するわが子」(70・10『文学界』)「青丘の宿」(71・3『群像』)「砧をうつ女」(71・6『季刊藝術』)「半チョッパー」(71・11『文藝』)「私のサハリン」(72・1『群像』)「人面の大岩」(72・1『新潮』)など立て続けに発表した初期作品で断片的に語られてきた過去を「趙愚哲」という一人の人物に人生を語らせることで、在日朝鮮人の苦難の歴史が展開されていて、これまでの作品の集大成ともいえる。この大長編二作については後日に回して、本稿では、過去を「私」の記憶を通して人間形成過程が断片的に語られてきた初期作品、それは青春小説というより人間形成小説と呼びたいこれらの作品をみ直すことで、李恢成文学の世界が形造られる道程を探ってみることにしたい。

李恢成は当時日本領であつて樺太と呼ばれていたこの島の真岡町に、父・李鳳燮、母・張述伊の三男として生まれた。父は北朝鮮の黄海道出身、母は南朝鮮の慶尚北道出身である。朝鮮戦争で南北に分断という悲惨な状況に追い込まされたが、戦時中は日本の植民地とされて、日本国に隷従を強いられ、人間としての尊厳をむしり取られた。父の渡日は労働力補填のための徴用だったのだろうか。母は没落した家の一人娘だったが、一八歳の時、日本に出稼ぎに出て、父とは九州の炭鉱で知り合つて一緒になつたらしい。植民地時代の朝鮮が朝鮮人民にとつて如何に過酷だったかは、本学『紀要』発表論文を中心とした拙著『植民地朝鮮における雑誌「国民文学」』(彩流社、2008・8・25)その他に繰り返し書いてきたが、日本敗戦で解放されたはずの朝鮮人民をまたもや、米ソ(当時)の対立を背景とした朝鮮戦争という理不尽が襲う。両親が九州から北海道へ、さらに樺太に渡つたのは戦時中だが何時だったのだろうか。李恢成の誕生が一九三五年なので早い段階だったと思われる。すでに前掲書に詳筆しているので重複はさけるが、日本の植民地とされた朝鮮人から国語(朝鮮語)を奪い、日本名を名乗らせ、「天皇の赤子」として、天皇の「醜の御楯」として死ぬことを名譽とする皇国民造り政策下で生育した少年期を描く李恢成文学は重い。「北であれ南であれわが祖国」を思想的信条とした立場は揺るがない。朝鮮人は他国の利益に翻弄された「恨」を山ほど抱えた民族と言えるだろう。その「恨」を与えた当事者として日本国・日本人は真摯にその責を負わねばならぬ。本稿では、作家出発作となつた「またふたたびの道」中心に李恢成文学の重い世界をみつめてみたい。

群像新人賞選評を挙げてみる。江藤淳は「青春小説」と位置づけ、捨てがたい文体の「ういいういしさ」には「饜えた文学臭のただよう余地がない」とあり、大江健三郎は、「政治的に硬化しない言葉によって」「自己表現をおこなおうとしてい」て、「正統的な生き方を戦後ずつともちこたえてきたひとりの在日朝鮮人を見出す」作品と述べている。野間宏は絶賛だ。「これまでの日本文学には、かつてなかった表現をもって、そこに提出されているのを見て、眼を開かされ、同時に大きく心を動かされた」、「誇張された非痛感ではなく」「苦い笑い」があるがそれは「ひとを突き刺すものではなく、読むひとの心と眼を少しづつくつがえして深い底へと導いて行くようなものであり」、分断された「朝鮮の哀しみも自然に出てくる」、「大きな作家として成長して行くだろう」との「予感」は予言になつた。安岡章太郎は、「全体を貫いて流れる呼吸の長さ」と強さに特色が

あり、「義母と、連れ子の豊子がよく描けていて」、魅力的と述べている。第一作と位置づけてもいい作が目される賞を受賞して幸運な出発を果たした李恢成について、李恢成文学を読む上で知っておいた方がいいだろうと思われるので、履歴を簡単に述べておきたい。初めて祖国の地を踏んだのは五歳の時、母に連れられて母の故郷に行った時。記憶は臆だ。一人娘の母は老父母を樺太に誘った。樺太で国民学校（注2）に入学。九歳の時の四四年、父母にとつて六番目の子が異常出産となつて母も子も亡くなる悲運に見舞われる。この時のことが書かれた短編『碇をうつ女』が芥川賞受賞作となつたのだが、私には『碇をうつ女』よりも『またふたびの道』の方が優れているように思われる。『碇をうつ女』によると母の日本への出稼ぎは関東大震災の少し後の時期だったらしい。この作の語り手「僕」には作者自身が投影されていて虚実の境は不明だが、「僕」にとつて母像の記憶は鮮明だ。

母は、「碇をうつて一生を過すごす邑むらの娘達のような」人生はおくりたくないと考えた新しい女性だった。育児にも見識があり、夫に対しても隷従はせず、言うべきことははっきり言う態度を崩さなかつたために、父は自分の旗色が悪くなると暴力で屈服させる男だった。母はそのような挙に出る出る夫を「身ぶるいするほど軽蔑していい」だが、それでいて「何くれと父を気遣い、盛り立てよう」ともしていた。九州から北海道、さらに樺太へと流れ者人生を選んだ夫を批判していた。愛娘を失つた祖父母の嘆きは大きく、祖母は早世した娘への嘆きを「何とも哀しい鎮魂歌」の「身勢打鈴シシセタリヨ（身の上話、節をつけて語る）」で哭き女のように身を震わせて娘の追憶を語るのだった。五人の子を遺して妻に先立たれた父は家事・育児に困じて、再婚は没後三年を経たからという朝鮮の風習を無視して、母没後一年あまりで、子どもは二人と偽つて春をひさいでいたともいわれる若い女性を連れてきて子どもたちの母とさせたのだ。ここでちょっと贅言を挟みたい。昨年（23）八月、李恢成の誕生地であり、チエホフの縁ゆかりの地でもあるサハリンに行った。真岡。ああ、ここが李恢成の誕生したところと感慨を深め、チエホフの碑その他にも思いを深めたが、驚愕したの地は、戦後七二年も経っているのに、雑草に囲まれてはいたが、複数の奉安殿や神社の鳥居の礎石、手水鉢、狛犬などが残っていたこと、さらに、現地民を強制徴用しただろう王子製紙の巨大な工場跡が荒れるに任せて何カ所にもあつたことだった。李恢成のサハリンを描いた作品には奉安殿や王子製紙が出てくる。この目で見たそれらへの驚愕は鮮明で、作品のリアリティを深めさせられた。四七年七月、ソ連領サハリンから一家で引き揚げ、函館引揚者収容所を経て、夏、日本人と偽つての引き揚げだったのでロシアのスパイ嫌疑から強制送還により九州の大村収容所に収監されたが、嫌疑が晴れて、秋に札幌に定着することになった。小学校を三度も転校してその手続き過程で二年遅れの卒業となっている。五二年、向陵中学を卒業して西高校に進む。徹底した皇民化施策下で日本名「岸本恢成キシモトキナリ」を名乗つて日本語で生きてきた李恢成が、高校生になつて民族意識に目覚めると、学友の誰もが彼を日本人として疑わないことに、日本人として振る舞っていることの苦痛を、藤村の『破戒』の丑松の苦悩に重ねて苦しむ。高校卒業後の五五年、父親との確執から東京に出てニコヨンその他肉体労働を転々して生活費を稼ぎ、夜は予備校に通い、早稲田第一文学部露文科に入学するが、生活は苦しく夜警などもしたりのパイトに追いまくられ、五年在籍して六一年に二六歳での卒業となっている。

卒論はドストエフスキー。民族意識に目覚めて朝鮮人としてのアイデンティティ確立をはかり、在日同胞との交流を深める。この年、朝鮮総連中央教育部に勤務。翌六二年、東大大学院生だった許承貴と結婚。六三年、朝鮮新報社に転勤。在任中に習作「夏の学校」を『新しい世代』に、「その前夜」を『統一評論』に発表、これは「統一評論」賞を受けた。母国語を覚えようと本気で取り組み、朝鮮語で小説を書くことを試みるがうまくいかず、身についた日本語で書く事になる。この年、長男誕生。翌六四年、何かと確執の多かった父が亡くなる。五九歳だった。朝鮮新報社を辞め、コピーライターや経済雑誌の記者をしながら創作に本格的に取り組み、『群像』に投稿の「またふたたびの道」が群像新人文学賞を受賞。幸先よい作家生活の第一歩といえる。以後は作家活動に専念し、芥川賞受賞作を含む相次いで作品発表で作家自立を果たしている。

『またたふたたびの道』とはどういう作品か。前掲の選評に見られるように在日朝鮮人による日本語作品と言うことで、日本語としての言葉に関心が注がれている。日本で生まれ、日本で育った李恢成にとつて、子どもの時から日本語の中で生きてきていて感覚も思考も日本語だった。彼が朝鮮人とは誰も気づかず、李恢成自身も日本人になりきっていたが、家に帰れば、植民地政策によって日本人にされてはいたが両親には朝鮮人が払拭しきれず争いとなると朝鮮語が飛び交うので、朝鮮語では話しても書けも出来ないがイントネーションは染みこんだ。民族意識に目覚めて朝鮮人になるために母国語のマスターに努め、母国語で書くこととするが、日本語の方が自然なのを認めざるを得ず、日本語での表現活動が中心となる。発表時作品に少し加筆して単行本(㉞、講談社)出版された時の「あとがき」に「僕はもだしがたい気持でこの作品を書いた。書かねばならぬ使命感のようなものすら感じていた」と冒頭部分にある。「もだしがたい」とはどういうことなのか。義母などにはかなりのフィクションを施しているが、素材となっている趙家の人々は「僕の家」、僕の「一族」で、「かつての不幸な日本帝国主義による朝鮮支配の結果、さいはての地(樺太―現サハリン)まで流れていった朝鮮人の事情をこの作品からいささかでも窺うことができれば幸いである」とあるが、サハリンの朝鮮人を描くことが目的では無く、「分裂した祖国の統一という朝鮮人に切実なテーマを背景に、その光をもとめている一朝鮮人家庭の姿を内側から捉えようと心がけたつもり」と続く。趙家の人々が「祖国分裂の憂鬱のなかで明日をもとめている姿」を描いたとの認識から当初「趙家の憂鬱」を題名にしたが、周囲の進言もあって、「趙家の人々がまたふたたび故里でまみえる日を未来に託した」「祖国回帰の心情」をこめて「またふたたびの道」と変えた。この題名から「祖国回帰の心情」を感じ取ってもらえれば「望外の喜び」と述べている。日本語の問題として「窺うことができれば」は日本語としてはいささか違和感がある。「読み取っていただければ」とか「汲み取っていただければ」の方が妥当だろう。そんな些末なことはともかくとして、『地上生活者』まで読んできた者として、李恢成の「北も南もわが祖国」は思想として李恢成文学における初発からの問題意識であったことを知ることが出来る。

横道にそれるが、韓国からの留學生の博論指導に当たっていて、彼・彼女たちの使う「植民地時代」と言う言葉に如何に鈍感だったかを『国民文学』論を書いて今更に思い知り、慚愧の念に堪えないが、南北分断の責を負う日本国の日本人の一人として負い目なしに朝鮮人の書く文学を読

むことは出来ない。

三一歳に設定されている主人公趙哲午チヨウテヨルオが勤務先から帰宅したところから始まる。次兄から長文の手紙が届いていて、そこには義母の帰国が書かれていたと妻・安熙アンヒから知らされる。哲午は母が亡くなって一年経つか経たぬというのに父が長男とあまり歳の違わない若い女性を連れてきて「お前らのかつちゃんだ」と言われた十一歳だったあの日のことに思いを馳せる。義母となった女性は豊子という哲午の一歳上の日本人の子だが義母の養女になっている子を連れ子にしていた。亡母の父母、哲午らの祖父母は怒って父の再婚の祝いの席に顔を出さなかった。義母となった女性が「嘘つきっ！」と激しく父を詰った声に驚かされたのだが、哲午には二人の兄と七歳と三歳の妹がいて五人兄妹なのに、後で知ったことだが、父は子どもは二人と嘘をついて連れてきていたのだ。騙されたことを知って激怒したものの諦めたのか、翌日から、鶏が時を告げる前から夜も遅くまで、際限のない家事にくるくると働きづくめによく働いたが、十五歳の長兄はこの義母を母と認めず、家を出て王子製紙で働くと弟たちに宣言していた。天皇の放送があったのは一年前だった。ソ連軍が上陸してきた。ソ連軍の流れ弾で死者が出、趙家の眷属にも死者が出た。屍体に鴉が群がった。義母を母と認めぬ長兄が家を出ると言って父を激怒させた。次兄の「あんちゃん、はやく逃げれっ！」の鋭い叫びに哲午は夢中で流しに走り、包丁を抱えて飛び出し縁の下に隠すのが常態になっていた。激昂すると見境のつかなくなる父への啾嗟の気配だった。「死者の遺したものに父がモーションをとりはじめると台所に走って包丁を隠す哲午の行動を「短距離競走」と書き、「人面の大岩」には「少年の頃、父ほどおそろしい人はなかった」とあり、高校時代の日記には「鬼、鬼だ、父はまさしく鬼なのだ。死んでしまえ。殺してやりたいくらいだ」と記されていたとある。

日本人の樺太引揚げがはじまっていて、遊び仲間が次々と去って行った。日本人には帰っていく国のあることが羨ましかった。祖父は、玄界灘、津軽海峡、宗谷海峡の三つの海を渡って一人娘の誘いに応じてこの地にきたのだが、娘亡き今は望郷の念やみがたく、遠く海の彼方を眺めて朝鮮に帰りたいとつぶやくのだった。ある日、突然、父の慌ただしい命令で一家は引越した。沢山の朝鮮人が故国に帰りがついていたがそれは叶わぬ夢だった。引越して三日目、父が明日朝早く収容所に入る。朝鮮に帰るんだ。見つかったらシベリア送りになる、偽造パスポートで日本人になりすましての引き揚げと子どもたちは聞かされる。あんなに帰りがついていた祖父母は残るといふ。年老いた自分たちが趙家の負担になることを潔しとせず、一粒種の娘の死んだ土地に骨を埋める覚悟なのだ。この祖父母を慕っている豊子も残った。哲午は豊子は棄てられたんだ、と思う。一家がともかく樺太から離脱できたのは父の先見の明あるいは気転により、要職のソ連人にソデの下を使って偽造パスポートを入手し、日本人になりすましたことによる。ほとんどの朝鮮人は樺太から脱出できず、取り残されて棄民の運命を辿らされたのだった。

一九六七年三月下旬、哲午は函館に向かう青函連絡船に乗っていた。二年前、あれほど帰国を望んでいたのに果たせぬまま父が死んだ。「アイゴ。このうらみをいつ晴らすやらー」朝鮮語で放つ呻き、叫びのこの言葉が哲午に貼り付いている。父の死は兄からの至急電報で知った。義母の

ことで相談したいという至急電報も長兄からだった。二十年前のことが思い出される。祖国に帰るつもりでサハリンから逃げ出したのだが、釜山への定期船で玄界灘を越えれば祖国に帰れるのに祖国の分断を初めて知った父は帰国を思い留まった。故里は北朝鮮なので三十八度線を越えねばならない。それは死を覚悟しなければならぬことだった。南朝鮮はというと乞食で溢れているという惨状を同胞から聞かされ、日本に留まるしかないと逆戻りして、北海道のS市に落ちつくことになったのだ。落ち着いた当座は帰国までの一時しのぎのつもりだったが北朝鮮への道は、日本が共和国と国交がないまま実現出来ずに歳月が流れて、ようやく、帰国の道が開けた時、一家揃って帰りたい父の意に沿う趙家ではなくなっていた。長兄、次兄、上の妹は日本人と結婚していた。哲午の妻は朝鮮人だが、日本で生まれ育った彼には日本での仕事があった。その上、哲午には民族教育の素地がない。朝鮮の歴史や地理、風習もほとんど知らない。肝心の朝鮮語すらろくに話せない始末だ。彼は大学を出たら、朝鮮人が朝鮮人であることを自然に感じる人間造りの民族学校の教師になろうと思っていた。在日朝鮮人にとって祖国とは何か。日本人として少年期を送った哲午にとって朝鮮人になるには、日本人↓半日本人↓半朝鮮人↓朝鮮人の経路を辿らねばならぬ苦難の道程だった。父は、祖国の土を踏むことも無く還暦を迎える前年に脳溢血で世を去った。祖父は父の死も知らずに、九十歳になろうとしている。

サハリンの祖父母とは連絡が取れず二〇年の歳月を経て思いがけぬ僥倖から安否を聞くことが出来、長兄の出した手紙に返事が来た。北海道にいたとは知らなかった。逢えるまで逢えてほしいという内容で、祖父母と、二人の子と夫と一緒に豊子の家族写真の二葉が入っていた。自分を置き去りにした父母を怨み続けてきた、育ててくれた祖父母を本当の親と思っているという豊子の手紙は義母には怨み骨髄の思いの溢れたものだった。

今回の帰省はハハノケン ソウダンアリの長兄からの至急電報による突発的なものだった。義母が駅まで迎えに来ていた。久しぶりに会った義母の、妻の身を案じた言葉に哲午は素っ気ない。義母には含むところがあつたのだ。妻は大学院生だった。すでに長男が誕生していたが第二子の妊娠に、後期に進む時期だったため長男を一年間預かってほしいと義母への懇願は断られ、やむを得ず、五ヶ月になっていた胎児を中絶したあときの辛さがトラウマになっている。中絶から一年も経たずに妻は今、妊娠中なのだ。大学院後期在籍中の妻にまたもや妊娠させてしまったことへの哲午の自責の念は見られない。

父の家には兄や妹たちも来ていた。義母の再婚問題だった。結婚の日取りが三日後に迫っていた。長兄はこのまま俺たちの母さんでいてほしい、再婚を決める前に俺たちに相談してほしかったと言ひ、さらに、二十歳前の娘が手鍋さげて飛び出すのは訳が違ひ、夫の三周忌を前にして再婚なんて非常識だ、死んだ親爺のことなんかどうでもいいのか、と不満を口にし、親爺は二言目には親より婢の方がいいのかって怒鳴ったけれど、実際に頼りになるのは連れ合いなんだ、ばあさんが自分の幸せのために出て行くというなら止められない、これが現実だ、と認めざるを得ない。年のあまり違ひぬこの義母を長兄は母と認めず、母さんと呼んだ事は無く、いつもばあさんだった。義母がはじめて口を開いた。

みんなの話を聞いていると胸が痛む、このままここにいるべきだと思う。自分だけがいい目を見ようなんて思っていない。どこに行っても「わたしには楽なんてない」。妻に死なれた今度の人は子どもが五人いて一番ばつちはまだ二つになったばかりで男手ひとつで育てるのは大変、とうさんのことは忘れてなんかいない、と。突然、上の妹が叫んだ。卑怯よ、子どもを育てに行く口ぶりなんて。自分が行きたいのよ、そう言えばいい、豊子を棄てたように今度はわちらを棄てようとしているんだ、お見事、と。義母は寂しげに呟く。どうせ、そんな風にしか思われなから。でもわちは十分なことはしてやれなかったかもしれないが、五人の子を育ててきた、とうさんはわちに会った時子どもは二人と言って騙して連れてこられた。豊子を連れて逃げ帰ろうと思ったけどとうさんが謝って頼むので運命と思って諦めた、そして精いっぱいやってきたのにそれくらいにしか言われななんだね。出て行くわちは薄情だと思われても仕様がな、でもわちは淋しかったんだ、どれだけお前たちに頼れるものか心細かった。とうさんが死に、わちは一人きりなんだって考えた、わちには相談する人がいない、こうも考えた、いったいわちには自分の人生ってあったんだろうかって。ずっと子どもを育ててきて年をとっちゃったのだよ。気がつく、わちを騙してつれてきたとうさんにも死なれてしまった。こんなこと言うと腹が立つかもしれないけど、わちの人生って何かもって違っていたかも知れなかったと何度も思った、何もいい暮しをしてこれたと言っただけじゃない、もっと自分の生き方ってあったように思ったのさ。そんなことを一人で考えるとこれからでも自分で生きてみたいと思うようになった、そんなとき今の人と会ったの、その人には五人の子どもがいると聞いた時わちはパルチャ（因果を感じた、パルチャならそれでいい、とにかく自分でもう一度やり直したい、でも本当は苦しい。順伊（哲午の末の妹）はまだ結婚してないし、哲丑から子どもの頼みを断ったのは自分のことを考えてみたかったからだけど薄情と思うだろう。

この作品についての評言のどれもに義母が好く書いているとあって定評になっているが、どうよく書いているか納得出来る分析はされていない。男権・夫権が日本以上に強固だったこの国の男・夫・親であった父の暴力に母も義母もどれだけ泣かされてきただろうか。「短距離競走」を繰り返させられた哲丑が父を殺したいほど憎み、朝鮮人として生きることを己に課した時、決して父のような朝鮮人であってはならない、が基本的理念だった。無教育の義母だが、自分の頭で考えた自分を生きたいの切実な願いには思想、換言すればフェミニズムが見られる。教育を受けた長兄はじめ哲午たちの方がはるかに遅れている。

翌日、義母の出かけた留守に哲丑はS市のN高校時代の親友だった西条兵八郎に会いに行く。単行本出版に際しての加筆部分である。高三時代に記憶は遡る。転生した彼は、大学進学模擬テストでの成績は抜群だったが、点取虫の秀才ではなかった。日本の再軍備や平和についての議論ではニヒルな発想で進歩派に疎んじられたが、真面目、誠実さで信頼されていた。彼と親しくなったのは彼から声をかけられたのがはじめだった。日本人として振る舞っていた哲午が本名が趙の朝鮮人であることを初めて打ち明けたのは彼だった。知らなかった、ちよっと驚いた、でも、朝鮮人だからといって、それがどうした？ 拘泥してるんならおかしい、日本人だって朝鮮人だってどっちだっていい、おれの前にいるのは君な



んだ、それだけのことだと西条は平然と言ったのだ。どっちでもいいじゃ困る、朝鮮人じゃなくては困るんだ、と哲午。哲午は自己を『破戒』の丑松に模して、テキサス行き結末には胸が締め付けられていたのだ。朝鮮人であることを隠してきたのは劣等感か、朝鮮人であることを「猛烈に自負したい希求がありながら、朝鮮人としての誇りを抱けない自分は半チヨッパリ(半日本人)でしかないのか。大東亜戦争時代哲午は先生の教えを守るヨイコドモだった。神話による皇民教育を真に受けて、「神武天皇の弓の先に止り、長スネヒコらをこらしめた金の鴉が翔んできて必ず鬼畜米英をやっつける」と本気に信じていた少国民だったが「金の鴉」は翔んでこなかった。丑松のように去るのでは無く「誇らしい朝鮮人になりたい」と思うようになっていた。「アイゴ。このうらみをいつ晴らすやら！」と言いつつ暗い父だが、毎日酒を飲んで暴れ母に暴力を振るった父のような朝鮮人であってはならないと心に深く刻み込んできたのだ。うらやましいなあ。おまえにはおれにない希望ってものがあるもの」と哲午の長い告白を聞き終わると呻くように西条は言ったのだ。以後、二人は受験書を脇におしやって時間を忘れて「青春」について話し合う仲良しになった。西条は大学受験を目前に控えて、雑貨商の家が倒産寸前になり、長男として老父に呼ばれて帰らざるを得なくなった。それから幾ばくもせずに、哲午は、怒鳴る父、ひっそりと手を拱いている義母の姿に象徴されるこの家の暗さから逃げ出したくなり、お前まで出て行くのか！とわめく父を振り切つて家を出、東京に向かったのだ。あれから一〇年以上が経っている。西条の職場に電話すると驚き、喜び、会議中なので近くの喫茶店で待つことにする。

十年余の歳月を経ての再会は時計の針をすぐに親友時代に引き戻し、話しは弾んだ。西条は結局大学進学を諦め、今は生協に勤めているという。炭鉱の生協に勤めた時、炭鉱労働者の惨めな実態を見たことで、この仕事に意義を感じたからと言う。哲午もこの間の自己を語る。朝鮮人としての一步を踏み出したものの国語が未習熟のため、冷汗をかくことの多いこと、義母の再婚話で来北したが、再婚を喜べない気持ちなど。西条は優しい。「きみん家の悲劇は日本の朝鮮合併に端を発している。もし植民地化されていなければ起らなかった家庭悲劇、それがきみの家の哀しみだ」、「おれたち日本人はきみら朝鮮人のもつ不安や不幸に深くたずさわっていて、それでいてその不幸を身近に知らない、そのことが羞かしいし、つらい」と。日本人の多くが意識しようとしなかった韓国(朝鮮)侵略の犯罪性に気付いて懺悔する西条を登場させたことは、この作品の奥行きを深めている。

この作品が戦後二十年段階での作品であることを意識において読まねばならぬだろう。この稿の冒頭に挙げた拙著は植民地支配の実態を描いたものだが、日本による植民地政策が、朝鮮人の人権を根こそぎ奪い、人間としての尊厳を略奪したものであったかを戦後七十年も経って、ようやく気づき、羞ずかしさ告白の書でもあるが、ほとんどの人たちはこの実態を知らない。踏んでる者には踏まれている人の痛さが分からないのだ。踏んでいることすら意識にないだろう。

明日また会う約束をして別れた後、哲午は義母について初めて客観的視点にたつて考えてみる。父は五人の子のいる家に不可欠な働き蜂として

騙して連れてきたのだ。そこには男女間の愛も個の人権もなかった。逃げ出すこともできず、二十年余を「趙家のオモニとして」諦め、辛抱し、歳のあまり違わぬ長男からばあさんと呼ばれ、夫の暴力に耐えながら育児と家事に追い回されてきて、彼女が生きて行く上での「庇護者」ではあった夫と死別から二年後、朝鮮の風習に反して夫の三周忌を待たずに、愛する人を得て趙家を出て行くこととしていることに、趙家の子どもたちは、このことを「義母のつれなき」「裏切り者」としか見ず、理解しようとはしない。風習をいうなら、妻没後一年で、義母をつれてきて再婚した父の方が不徳の度合いははるかに深い。義母の再婚を容認できぬ心情から抜け出せぬまま、義母のこれまでの人生を思いやってみると、これまでを不幸と感じていた義母が初老の年になってやっと幸福を掴もうとしているのかもしれない、それなら、祝福してやるべきだろうと、論理や理性では思えるのだが感情が先行して、結局、義母の結婚式には五人の子どもは誰ひとり参列しなかった。子どもたちにはエゴイステックなふくむところがあって、意識的に無視したのだった。

次兄から長文の手紙が哲午夫婦宛に届いたのはあれからどのくらい経っていただろうか。哲午がすぐ開封しようとしないので、宛名が連名だったので妻が先に読んだ。そしてオモニのことをもっと理解してあげるべきではないのか、オモニは小学校すら行けず、数字すら書けなかった、そんな生活をしてきて、やっと幸せを求めようとしている彼女の人生を考えてやってもいいんじゃないかしら。私は自分が幸せだとおもうの。夫と子がいて必要なことが満たされている。親の世代で朝鮮人の女が大学院で学ぶなんて考えられなかったことだものと、夫の頑なさをそれとなく批判する。ここには、妻の視点を通して作者のフェミニズム思想が見られるが、父の古さを批判したその視点で女性を取り巻いていた古きものを脱ぎ捨てて、大学院に通う妻を肯定する平等思想が顕在するが、それと義母に対する感情や対し方には矛盾があって真の平等観にはまだ遠い。次兄からの手紙は義母が帰国することになったことの知らせだったが、そこには、自分たちが如何に義母を理解しようとしてこなかったか、幸せをみつけた再婚を喜んでやるどころか式に誰も出ようとしなかった仕打ちへの後悔などが縷々と書かれていた。

場面は変わり、何かと対立する樺太時代の学校友達のは同じ職場で働く金北鳴とのやりとりになる。仕事を終えた哲午に声をかけてきたのは金だった。「母堂が北韓へ帰られるんだって?」「そう、共和国へ帰ることになった」。以下に展開される哲午と金のやりとりには戦後二〇年当時の政治状況と作者の思想的立ち位置が反映されていて複雑な思いを誘う。樺太Ⅱサハリンの韓国・朝鮮人は朝鮮半島南部（現韓国）の出身者が多かったという。哲午は北Ⅱ共和国側に立っている。大学卒後の勤務先も北側の総連関連だった。金は南側―民団側だ。北を悪く言う金に哲午は「行って確かめたらどうか」と挑むように言う。金が「自由がないところにはたとえパンがあってもごめん、祖国往來が自由になれば別だけど」と返したのに、哲午が、金は自由の意味をはき違えている、南朝鮮がアメリカの植民地にされてどれほど苦しんでいるか、彼らに自由のひとつかけらでもあるのか。在日同胞があれば共和国に帰るのは共和国に希望を感じているからだ、そこに真の自由があるから帰って行くのだ、と哲午。哲午は北を信頼している。金は詰め寄る。樺太に抑留されている四万人僑胞はどうなる? 黙殺するのか、と。哲午は祖国とソ連との国家間の問

題だろうと言いながら、「サハリンに留まっている同胞にも帰国の道を講じていると信じたのだが、下手すると、そのままサハリン同胞が少数民族化してしまう不安を抱いて」もいた。金は追い打ちをかけるように、「忠誠心を誓うためにも」「信じざるをえないわけ」か、金日成とブレジネフが何をどう考えているか知らんが、樺太抑留同胞の運命に無関心でいられるはずはないだろう、僑胞の運命に対しても、と挑みかかる。哲午には当時の李恢成が投影されている。李恢成文学には自分や家族を色濃く反映したものが多く、とすれば、次の哲午の言葉は李恢成の当時の政治的、思想的立場だったと推測できる。

「率直に言って、サハリンの帰国問題がどう進捗しているか、知らないのだ。そう、言おう。だが、信じている。やがて、解放されるだろう。同じ屋根の下で単一民族が暮らすために共和国がとっている一貫した政策がかならず樺太、いやサハリンにいる同胞達にも光を与えることになるのだ。よくわからぬが、社会主義国家間でも未解決の問題はあるだろう。だがかならず解放されるだろう……そう信じているのだ」

金に「信じる、信じるって、ただ信じただけでしょ」と笑い返される。サハリンにいる同胞の問題がどう解決されるのか皆目見当がつかないのが哲午にとっても現実なのだ。祖父に会いたい切実な思いがこみあげ、一刻も早く解決してほしいと願いながら、政治的なものの存在が壁のように立ちはだかり、「人間の解放と尊厳のために誕生してきた社会主義のなかでこうしたことがこれ以上続いてよいものかどうか疑問」もわくのだが、自分にはわからぬ何かがあるのかもしれない、と共和国への信頼は失わずに思うのだった。

サハリンの親戚からの手紙によって邂逅の日を待ちわびている気持ちが伝わってきて、つらい。生活に不自由は無いらしいが、祖国を離れて暮らす苦痛が如何に大きいかがよくわかる。一日も早く、その人々の願いが叶えられるべきなんだ、三八度線の南北で生き別れを強いられている四千万同胞、もちろんサハリンの四万同胞もだが、民族の問題として、祖国の統一こそ何より優先すべきだと、熱っぽく語った哲午を受けて、金も、サハリンの同胞の問題は国の統一の過程で解決される問題かもしれない、お節焼きのアメリカ人を南朝鮮から追い出し朝鮮人同士で国の統一を図るべきだと応じ、統一こそが喫緊の問題という点で意見は一致するが、最後に金は釘をさす。自分は韓国の民主主義のために現政権と闘う、哲午とは対立したくない、と。哲午も、我々はきつと、もつと理解し合えると思う、また話し合おうと仲良しだった友人と別れて、ドアから出て行くこうとする哲午に金が「母堂の幸せを祈る」とかけた言葉に「勿論、オモニは幸せになるよ」と答えて、妻子の待つ上野駅へとタクシーに飛び乗る。李恢成は本気で北を信じていたようだが金大中が政権についた時、韓国籍に変えている。「オモニ」たちは幸せになっただろうか。

上野駅では妻の安熙が息子の民と、発車時間を気にしながら、なかなか姿を現さぬ夫の到着を、今か今かと待っていた。民はハルメに会いに行ける旅行が嬉しくて興奮している。義母から帰国前に一目会いたいとの強い希望を聞かされて、民を一年預かることを断ったために安熙が中絶し

たことを義母はずっと気に病んでいたことを知る。安熙は哲午に帰国したらもう金輪際会えないだろう、「あなたのオモニ」なんだから、新潟へ見送りに行くべきだと見送りを強く勧めたのだった。オモニはもう自分たちのオモニではない、裏切られたという感情は消えないが、だが、とも哲午は思う。父があればほど望んだ帰国を果たせずに世を去り、祖父達も何時帰れるかわからない、今は趙家のオモニではないが、趙家の人生を送った人として父や祖父達のかわりに帰ると考えれば肯定できる、と自分に納得させての新潟行きなのだ。

時間がないと苛立つ安熙の目に、大股で改札口の方から夫が近づいてくるのを目にして、「ほら、アポジがやってきたよ」と民を引き寄せるところで、作品は終わる。

李恢成は金日成政権を信じていたのだ。この頃の李恢成は南北統一、離散家族が自由に会える日の来るのはせいぜい十年後くらい、どんなに遅くとも二十年後には実現出来ているだろうと信じていたようだ。だが、情勢ははもつと複雑だった。今年（二〇一八年）八月、四月の南北首脳会談で合意し、韓国の文政権下で初めての再会が一五年一〇月以来、約二年十ヶ月ぶりで実現した。といっても、南北の二万三千人が離散家族再会事業に参加し、韓国統一省への登録者は七月時点ですでに死没している人も含めると一三万二千人に及び、存命者も八五割が七〇歳以上という現実なのに選ばれた韓国側の訪問者八十九人（えっ！ たった）、北朝鮮側の八三人が、涙の再会を果たしたという。しかも、言葉に窮するが一緒に過ごせた時間は十一時間だったとのこと。この人達の責任でもないのに、いきなり、親子、夫婦、兄弟姉妹、眷属が引き剥がされて七十年が経つ。休戦状態のままの朝鮮戦争を終戦にして、一日も早い統一をと願うのは当然で、分断には日本も責任があるのだから統一のための環境造りに力を出すべきだろう。

李恢成は二六歳での大学卒業後、就職したのが朝鮮総連中央教育部と年譜にある。北側だった。北朝鮮が本場に民主主義政権と信じていたのだらう。「死者の遺したもの」には作者自身を模した東植と長兄の泰植との仲の悪さが描かれる。政治的にも敵対関係である。泰植は民団で東植は総連なのだ。故国が統一してその祖国の土を踏むことだけを楽しみにしていた父が、夢を叶え得ぬまま急逝した葬式は簡単ではなかった。父の故郷は北で、喪主の長兄は民団である。総連幹部と民団幹部の間で激論となる。民団にも総連にも無関係の次兄明植が統一を願っていた父の遺志を尊重して共同葬賛成の立場に立つ。ぎくしゃくした異様な雰囲気の中で両派の弔問客の敵視感情のぶつけ合いは、総連の分会長が何気なく目にした額、それは天皇が白馬にまたがっている古い写真だったが、それを指さし、これ外してくれませんか、と言って民団の幹部と目を合わせ、一致の表情によって、共同葬は事なきを得て無事に終えることができた。父は貧乏で甲斐性がなかったから遺産も遺してくれなかったけれど、兄弟が仲良くできる機会を作った、と考えたい、という明植に泰植も同調する。共同葬が争い無く無事に済んだのは、温順な明植の存在が大きいが、天皇の額外しが決定打になっている。植民地・南北分断の根源に厳存する天皇問題は共通認識だったことによる。このエピソードは重い。

『またふたたびの道』には、天皇の赤子として恥ずかしくない立派な「少国民」になることが哲午少年にとって最大の課題で、それを見事に実現出来ていて、誰も彼が朝鮮人とは気付かなかったのだが、高校生になると、民族精神の目覚めから朝鮮人であることを隠す苦悩を丑松の苦悩に重ね、作品の結末に見る丑松の敗北の道を自分とはとるまい、誇りの持てる朝鮮人になりたいと、真剣に考えるようになる。彼の考える朝鮮人像は決して父のようになってはならぬという事だった。父は気に入らぬと見境無く妻にも子にも暴力を振るった。父の粗暴さは恐怖の的だった。台所の包丁をふりまわした。「死者の遺したのもの」には、「父がなにかといえは鉄拳を見舞い」挙げ句に台所目掛けて走る。それとみると東植(三男)作者を投影が父より早く台所に突進して包丁をとると外に走って包丁を隠すのだった。これを「短距離競走」と表現している。そんな父を心から軽蔑していた兄泰植が父と変わらぬ暴君になり、さすがに子どもを打つ事は無かったが妻を打ち据え足蹴にした。父はまるっきり無学で「自分の行為を知性でつむむことをしらなかった」が兄は知識人だ。東植たち弟をも打った。それは許せぬ事で、兄との対立は深まり、抛った組織の違いがより対立を深めていたのだった。共同葬がふたりの仲の悪さを縮めはしたが、以後はどうなったのだろうか。父の暴力に対する怒り、憎しみは、「伽耶子のために」「砧をうつ女」「百年の旅人たち」その他にも繰り返し描かれている。

創氏改名で「岸本」と名乗った李恢成は、国民学校時代、日本人以上の日本人として天皇の赤子として国に忠を第一義に考える「少国民」だった。朝鮮人であることをひた隠しに隠し、日本の植民地であった卑下から、成績がどんなによくても、彼に意地悪する金持ちの息子の日本人を追い抜かないで二番に留まることに腐心する少年だった。韓国・朝鮮を侵略し、差別し続けてきた日本人には彼の苦悩を想像することは不可能だろう。罪は深い。

本国に住み続けた人たちについてはよくわからぬので措くとして李恢成に即して在日朝鮮人の側に立って想像を巡らすのだが、戦時下、日本政府が炭鉱や鉄道その他の労働力として朝鮮半島で甘言による募集さらには徴用政策によった渡日の一世代が「ウエノムセキ(倭奴め)」とののしり、「ほんとうにイカのような腹黒い胃袋を持った人間」「チョッパリ」と言い、「アイゴ、このうらみをいつ晴らすやら」と叫ぶ十分な、十分すぎる理由が存在するのは当然だろう。日本帝国主义時代の支配の実態は過酷である。日本が負けて終わった戦後に至るも加害者日本・日本人は懺悔、謝罪、補償して、人間として対等に対したか。差別と偏見はむしろ加速され、ネトウヨらヘイトスピーチに依存する差別主義者たちのメンタリテイ健在の現状を、どう解すべきなのか。一世が日本人に対して怨念一途であるのは理の当然であろう。八月十五日が在日朝鮮人にとって解放であったのと同日ではないが、多くの日本人においても日本帝国主義の犠牲者だったが、支配者と被支配者の関係であったことで軽重の差は比ではないだろう。そこに日本人は自覚的でない。為政者の多くが日本会議の重鎮になっている現実が如実に証明している。李恢成たち二世は一世の怨念一途とは違う。戦後二十五年段階の発言だが、「八月十四日までの少年少女達、つまり二十五年前のぼくらは純粋に〈聖戦〉を信じ、天皇を信じ、やがて戦地におもむくための感受性をみずからに培養したのであった。(略)かつて朝鮮人少年少女達が〈一視同仁〉の〈玉意〉にそっくり古の帰

化人たる田道間守をめざしたこととそれはちつともかわらなかつた。あの時代にはほくらは本質的にファシスト少年少女であるか同化少年少女であること以外にはありえなかつたが、八月十五日によってそれまでの生き方が裏切られたことで「民族の子として祖国の発見」を可能としたことを考えると、同じく裏切られた日本人にとって「国家の再発見」や「自己の確認」は朝鮮人以上に大変かもしれない（今日、われらにとって文学とは何か）『群像』(2010)と二世の立ち位置を未来志向で述べながら、同世代の日本人への優しい理解が示されている。

「民族の子として祖国の発見」が李恢成文学の課題となるが、朝鮮人的なものを腑分けして、踏襲・継承せねばならぬものと、父の暴力に象徴される古き男権・夫権制度を打破して新しい朝鮮人像の樹立への闘いへと進み出ることになるが、それは以後の作品で示されることになる。

(注1) 本紀要二〇一四年から一七年まで四回にわたって発表した「戦時下『国民文学』の位相」に加筆し、さらに別稿を足して、二〇一八年八月十五日初版第一刷日として上梓した『植民地・朝鮮における雑誌『国民文学』』（彩流社）を参照されたい。植民地にされた国の悲惨の実態がいかに酷いかわかるだろう。ついでに言えば、徴用工問題に関して、戦時下の外国人労働者に対する虐使の実態を松田解子の『地底の人々』、拙著『気骨の作家 松田解子 百年の軌跡』、拙文「恐るべき人権無視 花岡事件」(2010・5・7)、「地底からの悲鳴 今も」(2014・7・31)、共に「東京」「中日」新聞夕刊」によって知ってほしい。

(注2) 一九四一年三月、小学校令を改正して「国民学校令」が公布され、小学校は国民学校となった。「国民学校令」第一条の「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ目的トス」とあり、「皇国ノ道」とは、教育勅語に示された「国体の精華と臣民の守るべき道との全体」をさし、「皇運扶翼の道」と解し、国民学校は「教育の全般にわたって皇国の道を修練」させることを目指した制度。